
夢の跡

けんぼ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢の跡

【Nコード】

N1521S

【作者名】

けんぼ。

【あらすじ】

夢は時に、良い思いをさせてくれる。

夢は時に、酷い思いにさせてしまう。

人によって異なった夢を見て、人によって異なった人生を歩む。今

日見る夢は良い夢か悪夢か。

短篇集です。

夢の跡

暗い。真つ暗だ。瞼を上下に動かしても全く状況が変わらない。いよいよ自分の視覚能力すら疑う程の暗闇の中、募る恐怖を何とか抑えつつ状況の把握に勤しんだ。

答えは悩んだが、割合納得できる解答を思いついた。

眠っていたのだろう。その眠りが何かの拍子に解け、今に至るわけだ。この暗闇は真夜中であるせいで、月明かりが見事に雲によって遮られ、その暗さには拍車がかかっている。今となつてはその雲は流れ去り、月はこの上ない程に美しく、その綺麗な円形から妖しい光を発していた。

この時点で、私が恐怖する理由は跡形もなく消え去った。ほつとした。

床から離れ、微かな尿意と共に急な階段を下りた。

驚くほど軽やかにその階段を下りきると、右手にトイレがある。短い間ではあったが、今夜の尿意とはこれでお別れである。

何とも言えない気持ちに苛まれたつトイレを出ると、ふと「月見酒」というロマンティックな発想が生まれ、すぐさま冷蔵庫から買い置きのをビールを取り出し、縁側に出てそれを実行した。

月の美しさに酔ったのか、ただ酒に酔っただけなのかよく分からない気持ちに酔いしれた。何だか夢見心地だった。

次第に体が軽くなってきた。実に心地良い。足が地上から右足、左足の順にゆつくりと離れた。ゆつくりと、しかし確実に地上から離れて行く私は満面の笑みだ。

ちょうどいい高度に辿り着いた時、急に地上と平行してさつきよりもだいぶ早い速度で私の体は飛行し始めた。満面の笑みだ。

気持ち良い。実に気持ち良い。満足だ。先程感じたつまらない恐怖は何だったのか。そんなことはどうでも良い。気持ち良い。ああ、気持ち良い………

私は目覚めた。煌々と輝く太陽によって強引に起こされた。

夢だったのか。惜しい。後少しあの気持ちを味わっていたかった。太陽め。私をあの夢から現実に戻した罪は重い。今夜からはサングラスをして寝てやろう。

くだらない決心をした後、急激に冷静になった私はある違和感を感じた。

「それ」はどうやら私の股間辺りで催しているようだ。微かに尻辺りにも感じる。

嫌な予感がした。恐る恐る乱れた布団を捲る。ゆっくりと腰を上げる。少しの沈黙の後、私は確信した。

「それ」は、にわかにはオーストラリアの大陸の形に似ている。面積はそれほど大きくないことから、一点に集中砲火を受けたようだ。まだ尿意の次の工程で現れる「それ」とはお別れしていなかった。それどころか、厄介な付き合いになってしまったようである。

戦慄した。

道理で気持ち良いはずである。それはそれは気持ち良かったであろう。「それ」をして気持ち悪い人などいないはずである。「それ」をした後、夢は続く理由を無くし、消え去った。私は起きるべくして起きたようである。

だとしたら、私は太陽に謝らなくてはならない。何の罪もなく、ただただ私達人間に光を提供するためにはるばる地球の裏側からやってきたのに、その良心をことごとく否定されたのである。いい迷惑である。

ひとしきり謝罪を込めて太陽に朝の挨拶を終えた後、清々しい思いで部屋を振り返った。

白いキャンバスには既にアートが描かれていた。タイトルはおおよそ「夢の跡」とでもいったところだろう。

私の朝が、始まった。

正夢

悪夢を見た。悪夢というものも様々な種類のものがあるが、私が見たのは、失敗する私が描かれた、酷く現実味溢れる悪夢であった。こういった悪夢はたちが悪い。起きた時に気分がすこぶる悪くなるのは勿論のことだが、一番たちが悪いのはやはり、何時間寝ていたとしても全く寝た気がしないことである。はちきれんばかりに溜まりきった疲れが、次の朝にもきっちり同じ分量で残っている。

ただし、見たくないからといって見なくなることはない。何しろ夢は操作できないのだ。何という理不尽なことであろう。実にしゃくである。

いつまでも悪夢に対して毒づいていても仕方がないので、ぐわんぐわん唸る頭を何とか持ち上げつつ、会社へ出勤するための支度を開始した。朝飯は食わない。後々辛くなるのは分かっているが、そんなことも構わない程に今朝の私は衰弱していた。最低限の身支度だけして、歩きなれた会社への道のりを、いやに長く感じつつ歩いた。

会社はいつもと変わらない雰囲気だった。それもそうだろう。私一人の具合が悪くとも会社としては気にすることはない。気にすることは無利益な慈悲なのである。

徒労なのである。

勝手に具合悪くなり、勝手に不機嫌になり、仕事もはかどらない私は、案の定上司の罵声を浴びた。

うるさくてたまらない。知ったものか。上司など糞食らえである。益々不機嫌になった私は、書類の内容をこっそり間違った。我ながらとんだ失敗をしたものだ。再び同じように叱られつつ、気を取り直して仕事に取りかかる。

私はその時、ある違和感を覚えた。過ちを犯したわけではない。

ただ、何か頭の片隅に引つかかるものがある。

そうだ、私はこれと同じ体験をしたことがある。今朝の悪夢だ。今でもしっかりと覚えていて。現在起きたことと、あの悪夢は、驚くほど相似している。これは……。

「正夢」というやつなのだろうか。いや、そうに違いない。そうでなくては、この現象を説明することなど到底不可能だ。ここまで相似しては、偶然という一言では納まらない。何という奇怪な現象なのだろう。

結局この日は、その興味深い出来事が終始気になり、仕事もはかどらず、上司の説教で気を落とすのも惜しんで物思いにふけていた。

私はその日から、毎晩と言っても良い程正夢を見た。しかし大体は、新しい剃刀を買ってきて試したら、案外良く切れる代物であったせいで赤い髭ができたり、出勤途中で喫茶店に入り、砂糖を二杯入れた甘口のコーヒーの一口目が熱すぎて渋い顔するといった平凡なものであった。別に正夢でも何でも無さそうな程平凡極まりないが、要所所で全く重なる場面があるので、私はこれは正夢だと踏んでいる。

勿論悪夢も見た。その日は一日中憂鬱だった。度々上司に説教された。社長にもものを申された。私のストレスはピークに達していたというのにも関わらず、良い正夢は全く見なかった。理不尽である。

ある朝、私は悪夢を見た。その悪夢は、信じられない光景を映し出していた。

死体がある。それが誰であるかは分からない。傍らで立ち尽くしているのは、私だった。これは私がやったのだろうか。いや、発見者なのかもしれない。いずれにせよ、恐ろしい悪夢である。私には正夢でないことを祈ることしかできない。

兎も角、私は会社へ行かなくてはならない。私はサラリーマンなのである。血なまぐさい悪夢を今朝見たしがない平社員なのである。

気にしてなどはいられない。山となりつつある仕事を消化するために、私は出勤した。

会社での私は、いつものように気が散っていた。今朝の悪夢である。結局私はそれを忘れることはできなかった。仕事は忘れる癖に、こういった忘れたいことは忘れられない。何とも役立たずな脳である。

このままではどうせまた上司に叱られるので、私は洗面所へ顔を洗いにいった。鏡を見ると、私の顎にはうっすらと青緑に変色していた。どうやらそれ程焦っていたようである。何だか情けなくなつた。

この前買った良く切れる剃刀でそれを剃つた。なる程、実に良く切れる。その間に他の社員も洗面所へ入ってきた。どうやらお疲れ気味である。

ふと彼の首筋を見た。青緑の曲線が浮き出ていた。さてはコイツも悪夢に見舞われたクチだろう。その剃り忘れで直ぐに分かるぞ。私が剃つてやろう。ああ、私はなんて慈悲深い男なのだろう。

私はそれを剃つてやった。案外良く切れる剃刀で、剃つた辺りに赤い髭が出来上がってしまった。困ったことに私の顎まで赤い髭が飛び火していた。この剃刀は切れすぎる。今度また新しい剃刀を買おう。私はそう考えながら、何とも言えない渋い顔をした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1521s/>

夢の跡

2011年10月8日23時01分発行